

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：17102
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：17K02174
研究課題名（和文）クワイン以後のメタ存在論に関する包括的研究

研究課題名（英文）Metaontology after Quine

研究代表者

倉田 剛（KURATA, Tsuyoshi）

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：30435119

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：『現代存在論講義I・II』（新曜社、2017年4月、10月）の中では、クワイン的メタ存在論とそれに異議を唱える非標準的メタ存在論（虚構主義、マイノング主義、新カルナップ主義）との方法論的論争を整理・分析したうえで、近年のラディカルな非標準的枠組みに対して、より穏健な枠組み、すなわちクワイン的メタ存在論に見いだされるプラグマティックな手法をポジティブに捉える枠組みを、「実践的制約」等の概念に訴えつつ提案した。また『日常世界を哲学する：存在論からのアプローチ』（光文社新書、2019年）において、その新たな枠組みを、社会存在論の領域に応用することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義は、近年メタレベルの研究にシフトしつつある存在論研究の最新の動向を分析した上で、実際の存在論構築に指針を与えうるような実践的枠組みを提案することができたことである。研究代表者は、この新たなメタ存在論的枠組みが、より適切な「社会存在論」の構築に寄与することを確認した。

研究成果の社会的意義としては、『現代存在論講義I・II』（新曜社、2017年）という概説書、『日常生活を哲学する：存在論からのアプローチ』（光文社新書、2019年）という一般書の出版を通して、研究主題の重要性を広く社会に知ってもらうことができた点を挙げておく。

研究成果の概要（英文）：In my Lectures on Contemporary Ontology (Shinyosha, 2017), we clarified the methodological debate between Quinian "standard" metaontology and non-standard ones (fictionalism, Meinongianism, neo-Carnapianism) which are opposed to it. We then proposed a new framework inspired by a pragmatic aspect of quinian framework, as opposed to today's most non-standard metatheories. Our new framework was also applied to the field of social ontology in my book of 2019.

研究分野：哲学

キーワード：存在論 メタ存在論 社会存在論 分析形而上学

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始するまで、一貫して研究代表者は、従来の一般存在論が主題化することを避けてきた社会的・文化的対象の本性と存在様態について考察を重ねてきた。その研究は、主に (I) 道具をはじめとする具体的人工物の種に関する研究、(II) 貨幣や株式会社といった制度的対象 (抽象的人工物) に関する研究、および (III) 音楽作品や虚構のキャラクターといった芸術作品でないしそれに依存する抽象的人工物に関する研究から成る。

研究代表者は、これらの一階の領域的存在論を研究する過程において、しばしば方法論的な課題が生じることを指摘してきたが、その課題に正面から取り組むことはできなかった。具体的には、現代存在論の標準的な見解では、量化概念 (quantification) と存在概念とは不可分の関係に立つとされるが、果たしてそうした見解が唯一の選択肢であるのか、あるいは他の可能なオルタナティブがあるのかといった問題を十分に考察しえたとはいえない。このことは具体的人工物や虚構の対象の「存在」を検討する研究にとって重大な影響を及ぼす。また、標準的な見解によれば、実在性は心からの独立性 (mind-independence) を含意するが、この含意をメタレベルで再考することなしに、制度的対象に関する実在論を論じることは困難である。さらに、標準的方法に埋め込まれた同一性基準 (identity criteria) に関する強固な信念についても再検討する必要がある。現代存在論においては、明確な同一性基準をもたないにもかかわらず、存在する、あるいは実在的であると思われる諸対象が盛んに議論されてきたからである。以上、「量化」・「心からの独立性」・「同一性基準」という三つの例が示すように、一階的存在論的探求を行うにあたって自明視されてきた諸概念をメタレベルで検討し直すことは、たんに研究代表者のそれまでの研究の自然な延長線上にあっただけでなく、そうした研究をさらに前進させるためにも必要不可欠の課題であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、今日メタレベルの考察に移行しつつある存在論研究 20 世紀の後半に再興を果たした「現代存在論」はある成熟期に達し、方法論的な反省を抜きにして、これ以上の進展が望めなくなったことを示している の現状を分析し、新たな指針を見いだすことであった。しかし、存在論の方法論に関する近年の論争は、多種多様な立場が相まみえ混沌の相を呈していることから、本研究は、W. V. O. クワイン以後のメタ存在論を、存在論的コミットメントの基準を軸とする標準的理論と、それに異議を唱える非標準的理論 (虚構主義、マイノング主義、新カルナップ主義など) との対立という構図の下で、包括的かつ批判的に検討することを目指した。こうした検討は、「制度的・文化的対象の存在論を構築するうえで適切なメタ存在論とは何か」という問いにも支えられている。

3. 研究の方法

本研究は、基本的には、現在の存在論研究のトレンドの一翼を担うものであるとはいえ、もともと背景にあった動機の一つは、制度的・文化的対象に関する適切な存在論的理論を構築する際に用いられる方法論を吟味することであり、それは一階的存在論から完全に離れて、メタ的な思弁に終始することとは異なる。したがって、本研究は、メタ存在論が課す一般的基準を個々の領域に適用することでその有効性を吟味するという方法を採用するだけでなく、領域的存在論の具体的構築から出発し、それらが示すメタレベルの問題を考察するという方法も重視した。

前者の方法に即した研究は、クワインにおける「存在論的コミットメントの基準」・「パラフレーズ的手法」・「同一性基準の要求」・「理論選択」・「儉約性」等に関する再検討、およびクワイン的メタ存在論へのオルタナティブとしての「虚構主義」・「マイノング主義」・「新カルナップ主義」に関する評価である。また、後者の方法に従った研究は、主に社会存在論の構築に関するメタ理論の検討である。

4. 研究成果

(1) 平成 29 年度の主な研究成果

単著『現代存在論講義 I: ファンダメンタルズ』(新曜社、2017 年 4 月)において、研究代表者は、クワイン的メタ存在論と、それに異議を唱える非標準なメタ存在論 (虚構主義、マイノング主義、新カルナップ主義) とのあいだの方法論的論争を整理し、「クワイン以後のメタ存在論」の最新の動向を分析した。また、単著『現代存在論講義 II: 物質的对象・種・虚構』(新曜社、2017 年 10 月)では、分析形而上学の代表的なトピックスとして知られる「物質的構成」・「自然種」・「可能世界」・「虚構的对象」等のトピックスを詳細に論じるに際し、近年のラディカルな非標準的枠組みに対して、より穏健な枠組み、すなわちクワイン的メタ存在論に見いだされるプラグマティックな手法をポジティブに評価する枠組みを提案した。さらに、哲学会第五十六回研究

発表大会（2017年10月）のシンポジウム「作品の美学」では、芸術作品の存在論について、メタ理論的なアプローチを行う提題発表を行った。そこでは、制度的対象としての芸術作品を記述するに際して、いかにして最適な理論を選択するのかという問題を論じた。とりわけ社会存在論の領域でしばしば議論される「地位機能の付与」と、ゲーム理論的な社会哲学で言及される「均衡としての制度」という概念をとりあげ、双方のメリットとデメリットを、一階の存在論およびメタ存在論という観点から明らかにした。

(2) 平成30年度の主な研究成果

近年の分析形而上学では様々なタイプの「非クワイン的メタ存在論」について議論が盛ん行われているにもかかわらず、社会存在論に関するメタレベルの考察はほとんどなされていないという問題点に着目し、研究代表者は、2018年8月に北京で開催された世界哲学会議において、社会存在論への「存在論的デフレ主義」の適用の是非に関する発表を行った。そこでは従来の「トリヴィアル・デフレ主義」の限界が指摘されるとともに、「実践的デフレ主義の可能性」が擁護された。この発表の成果の一部は、九州大学哲学会編『哲学論文集』第54輯（2018年）に、「存在論的デフレ主義を再考する」という巻頭論文として公表した。また、分析美学、とりわけその作品存在論に関するメタ的考察は、哲学会編『哲学雑誌』132巻804,805号合冊（2018年）に論文「制度的対象としての芸術作品：社会存在論の観点から」として掲載された。そこでは芸術作品論に関する制度論的分析の方法として、サールの標準的アプローチ（地位機能としての作品）とゲーム理論的なアプローチ（均衡としての作品）を対比的に論じ、そのうえで二つのアプローチは調停可能であることが示された。この二つのアプローチに関する考察は、その後、フッサール研究会主催のシンポジウム提題「社会存在論の「統一理論」：その意義と問題点」（2019）の中で、より一般的な仕方で展開されることになった。2018年12月に開催された西日本哲学会第六十九回大会のシンポジウム「現代形而上学の展開と応用」における提題発表では、ミクロレベルとマクロレベルの存在論に関するメタ的考察、とりわけ社会存在論における個人主義と全体論の問題に関して方法論的な検討を行い、「許容可能な全体論」に向けた、研究代表者独自の提案を行った。

(3) 平成31年度の主な研究成果

まず、日本哲学会第78回大会（2019年5月19日、首都大学東京）の学協会シンポジウムにおいて、「実在論と「心からの独立性」——社会種のリアリティを考える」と題する提題発表を行った。その発表では、社会存在論の一つの立場、すなわち「社会種の実在論」を擁護する際のメタ理論的基準を論じ、「因果的力」に関する基準を精査した。次いで、単著『日常世界を哲学する——存在論からのアプローチ』（光文社新書、2019年8月）を上梓した。この新書の中では、様々なタイプの社会的存在者に関する一階の存在論に加え、それについてのメタ存在論に関する議論を、一般読者を念頭に置きつつ行った。また、単著論文「社会的事実の存在論的構造——「アンカー個人主義」を再考する」（西日本哲学年報第27号、2019年10月）の中では、社会存在論の標準モデルが前提する個人主義的枠組みを批判的に検討し、「許容可能な全体論（集合主義）」の正当化に向けたメタ理論構築の必要性を説いた。単著論文「社会存在論の統一理論について——その意義と問題点」（『フッサール研究』第17号、2020年3月、電子ジャーナル）では、社会存在論の中心に位置する制度論において、ゲーム理論的アプローチとサールの標準モデルを統合しようとする試みを、メタ的視点を交えて批判的に考察した。

(4) 今後の展望

今後の展望としては、本研究で得られた存在論のメタ理論に関する様々な知見をもとに、ふたたび一階の領域的存在論の研究に立ち戻る予定である。とりわけ制度および制度的対象の存在論に関しては、今日多くの学際的研究がなされているにもかかわらず、その基礎は必ずしも盤石とは言い難い。幸い、研究代表者は2020年度から基盤研究C「制度に関する社会存在論的研究」（課題番号：20K00011）に従事できることになった。このチャンスを最大限に活用し、社会制度についての存在論研究を国内外に発信していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 倉田 剛	4. 巻 第27号
2. 論文標題 社会的事実の存在論的構造 「アンカー個人」を再考する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西日本哲学年報	6. 最初と最後の頁 65-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 倉田 剛	4. 巻 第17号
2. 論文標題 社会存在論の「統一理論」について その意義と問題点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 フッサール研究（電子ジャーナル）	6. 最初と最後の頁 42-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 倉田 剛	4. 巻 71号
2. 論文標題 いかにして社会種の実在性は擁護されうるのか 「実在論的」社会構築主義についての試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 49-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 倉田 剛	4. 巻 第五十四輯
2. 論文標題 存在論的デフレ主義を再考する	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 九州大学哲学会編『哲学論文集』	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 倉田 剛	4. 巻 第132巻804, 805号合冊
2. 論文標題 制度的対象としての芸術作品	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 哲学会編『哲学雑誌』	6. 最初と最後の頁 102-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 倉田 剛	4. 巻 2017年12月臨時増刊号
2. 論文標題 社会存在論 分析哲学における新たな社会理論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想2017年12月臨時増刊号 総特集 = 分析哲学	6. 最初と最後の頁 89-107
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 倉田 剛
2. 発表標題 実在論と「心からの独立性」ー社会種のリアリティーを考える
3. 学会等名 日本哲学会第78回大会 学協会シンポジウム「実在論の可能性ーインド哲学との対話」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tsuyoshi Kurata
2. 発表標題 Ontological Deflationism and Social Ontology
3. 学会等名 World Cogress of Philosophy, Beijing 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 倉田 剛
2. 発表標題 社会存在論と個人主義
3. 学会等名 西日本哲学会第六十九回大会シンポジウム：現代形而上学の展開と応用（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 倉田 剛
2. 発表標題 社会存在論の「統一理論」：その意義と問題点
3. 学会等名 第17回フッサール研究会シンポジウム：「社会」の現象学の可能性（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 倉田 剛
2. 発表標題 作品と制度 社会存在論の観点から
3. 学会等名 哲学会第五十六回研究発表大会 シンポジウム「作品の美学」（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 倉田剛	4. 発行年 2019年
2. 出版社 光文社	5. 総ページ数 240
3. 書名 日常世界を哲学する 存在論からのアプローチ	

1. 著者名 倉田 剛	4. 発行年 2017年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 202
3. 書名 現代存在論講義 : ファンダメンタルズ	

1. 著者名 倉田 剛	4. 発行年 2017年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 192
3. 書名 現代存在論講義 : 物質的对象・種・虚構	

1. 著者名 人工知能学会編（「人工物の存在論」の項目を倉田剛が執筆）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 共立出版	5. 総ページ数 1600 (担当96-97)
3. 書名 人工知能学大事典（担当箇所「人工物の存在論」の項目）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----